



CLOSE UP VOICE

豊橋煙火 株式会社
代表取締役 加藤 公丈 さん

夏の夜空に大輪の花を
咲かす熟練の花火職人集団

新型コロナの5類移行に伴うイベント規制解除を受けて、豊橋の夏の風物詩である豊橋祇園祭が4年ぶりに開催され、夜空を彩った大輪の花は、待ち望んでいた多くの人の心を躍らせた。手筒花火発祥の地と語られる当地で、花火づくりの伝統を守り続ける豊橋煙火株式会社。熟練の職人集団を束ねる加藤さんに、三河の花火産業の歴史や文化、復活した祇園祭への想いを伺った。

(取材日：令和5年5月31日)

花火の技術と文化を継承し、
心躍る花火で人々を笑顔に

— 貴社の事業内容と企業の歩みを教えてください。

加藤 ▼ 蒲郡にある加藤煙火株式会社で義兄弟と一緒に働いていた先代の父に、豊橋祇園祭奉賛会から「豊橋で花火を作ってくれないか」との依頼があり、1951年に現在の豊橋市民球場のある場所で豊橋煙火株式会社を設立しました。花火工場は

三河の花火の特徴や歴史を教えてください。

加藤 ▼ 三河の花火は「祭礼の花火」である点が大きな特徴です。他地域の花火は、花火業者が大規模な装置を作って打ち上げる、いわゆる観光イベントとしての花火大会ですが、三河では、地元の人々が五穀豊穡を願って神様へ奉納するために自作の花火を打ち上げています。全国どこを探しても、地元住民が花火

を作って打ち上げる地域はありません。三河から、非常に特異な地域だと言えます。

三河の花火の歴史をたどると江戸時代まで遡ります。唯一幕府から火薬の製造・貯蔵を許されていたこともあり、三河の地では花火製造の高い技術力が培われ、現在でも煙火の製造業者が多く、今もなお花火文化が息づいています。

また、花火の歴史を語るうえで欠かせないのが花火職人です。江戸時代には「和火」と呼ばれる硝酸カリウムを使用した素朴な光が魅力の花火が主流でした。しかし、仙賀佐十は長崎での修行の過程で、塩素酸カリウムを使用した鮮やかな色の光を放つ花火を日本で初めて成功させ、「洋火」という花火を確立しまし

規制が多く、安全に製造を行うため、1981年にのどかな果樹畑が広がる現在地へ移転しました。その後、全国花火競技大会などにも参加し、入選や特等などを受賞しています。

弊社は、打ち上げ花火や手筒花火などの製造・祭礼等で扱われる花火の運営・管理を担っており、豊橋の夏の風物詩である豊橋祇園祭で扱う花火は、製造から運搬、設置、そして実際の打ち上げまでを我々が担当しています。

後に、「仙賀流」として世に知られるようになり、現在では仙賀佐十は「近代花火の祖」と呼ばれています。つまり、日本における近代花火は豊橋から始まったのです。

関東の花火大会では古くから「玉屋」「鍵屋」と掛け声がかかるほど、鍵屋さんは全国的に有名な花火屋ですが、実は三河で修行した職人が製造技術を江戸へ持ち帰り、花火を初めて商業化しただけのことです。当時の鍵屋のレベルの職人は、三河にはごまんといたそうなんです。先ほどお話しした通り、この地域では、神社の氏子が祭礼用に花火を作っており、各家庭で秘伝の配合や技があり、非常に花火に関する技術力が高かったからと言われています。

三河に住む多くの人々はこのような史実をご存知ないかもしれませんが、日本の花火を語る上で、三河地方、ひいては豊橋は欠かせないので、度々大学生が卒業論文の研究のために弊社を訪ねてくることがありますが、その理由を聞けば地域の花火のルーツを調べると豊橋にたどり着いたからだ、皆一様に答えるのです。そういったことを知っているのと、豊橋の花火の見方が変わるといえます。

INTERVIEW



豊橋煙火 株式会社
豊橋市石巻平野町字下大向野50
0532-88-4616

花火離れを危惧していましたが、

「花火を作るうえで大切にしていることを教えてください。」

加藤▼やはり、安全が第一です。本来、火薬は物を破壊するためにあります。当然扱いを間違えれば事故につながります。万一事故を起こしてしまうと花火職人や同業者にも迷惑をかけてしまいます。事故をきっかけに法律が厳しくなると、花火を観覧する機会を奪ってしまうことにもなりかねません。雑に扱うと火薬が怒り、大きなしっぺ返しをくらってしまうのです。我々も人間ですから、緊張感を保ち続けることは難しく、慣れや油断から気が緩みそうになります。花火を楽しむにしている方々のことを想い、気を引き締め直しています。

また、花火はどんなに同じ工程を踏んでも同じものは作れず、生き物を相手にしているようなもので、全く思い通りにはなりません。製造工程での温度や湿度、材料のわずかな分量違い、火薬の固め具合など、花火はダイナミックに見えて、実は大変繊細なのです。皆さんは、きつと綺麗な花火と想っていたら、常にもれませんが、私に満足感はなく、常に満点を目指して挑戦しています。大変難しいことですが、それこそが「花火」であり、その追求がとても面白いのです。

のが実態です。これにより原料が高騰し、物によっては5割上がったケースもあります。先に挙げた紙筒を作る紙管工場も今年の8月に撤退予定で、今後は機械を弊社が引き受け、自社で製造する運びとなりました。去年までは、高騰前に製造した花火を出荷していたため、価格を据え置いていましたが、今後どれだけの影響が出るのか見当もつかない状況です。

「4年ぶりに開催される、豊橋祇園祭に向けての抱負をお聞かせください。」

加藤▼まずは、開催に向けてご尽力いただきました皆様には、深く感謝しております。4年ぶりの開催ですから、「ぜひ皆様に見てもらいたい」という気持ちはもちろんありますが、それを抜きにしても、ただただ多くの方々に花火を見て楽しんで欲しいです。

「花火は古くからの伝統文化として親しまれていますが、加藤さんが考える伝統とは何ですか。」
加藤▼昔のままの姿を守ることが伝統だ、と考えている人がいますが、私は法律や規則を守り、祭礼に出せるという条件のなかで、良いものは積極的に取り入れています。つまり「時代に適した今の花火」こそが伝統だと考えています。そして、伝統は変化しつつも「繋げていくこと」が大切だと信じています。
例えば、昔のままの姿を守ることが伝統だというならば、手筒花火は昭和に入ってから孟宗竹に移り変わったので、真竹を使用しなければなりません。さらに、現在に至っては、紙筒で作られた手筒花火も徐々に増えています。

「紙筒の手筒花火について詳しく教えてください。」

加藤▼孟宗竹で作る場合はいくつかの問題があります。一度に200本もの竹を切り出しますが、その1割が乾燥の過程でひび割れてしまい使用物にならないのです。さらに、節を磨いたり、乾燥させたりと前工程の段階までで時間がかかるのです。そこで、竹の代替品がないかと研究開発の中で、紙を平巻きにした紙筒が適合するのではないかと考え、20年程前から開発をはじめ、約16

昨年の秋に三ヶ日で有観客の打ち上げ花火を行なった際、嬉しいことに例年より多くのお客様が集まり、大好評のうちに終わりました。長い間、花火を打ち上げられず色々と不安を抱えていましたが、我々はこの光景を目の当たりにし、「多くの皆さんが、花火を待ってくれているのだ」と感動しました。コロナ以前と全く同じ仕事量が戻ってくるとは考えていませんが、皆様が楽しんでいただける花火づくりに邁進したいと思えます。

「貴社が描く将来のビジョンを教えてください。」

加藤▼コロナ以前と同じように祭礼花火を大事にしつつ、新規事業を考えて、少しずつ増やしたいと思っていますが、今は急速に変化する時代にあった花火づくりを目指して、日々研鑽を重ねていくだけです。

地域の多くの方々に、花火を身近に感じていただきたいです。豊橋は、住民自らが火薬を詰めた自作の手筒花火を揚げる全国に類を見ない花火の町です。私たちのPR活動により、地域の多くの方々に、花火をもっと身近に感じていただき、若者が花火に興味を持ち、「花火を見にいきたい」「手筒花火を揚げてみたい」と思うようになり、参加する若者が増え、地域に活気を出せたらとても嬉しいです。

「多くの皆さんが、花火を待ってくれているのだ」と感動しました。

OTHER STORY

コロナ禍に生まれたヒット商品

完全に休業していたコロナ禍の3年間に、女性スタッフが個人の楽しみで始めたのが、手筒花火を模したミニチュアサイズのストラップ制作。試しにSNSやお祭りの露店で販売したところ、予想を上回る売れ行きでお客様からの評価は上々。メディアにも取り上げられ、さらに反響を呼んだ。本業ではないが、厳しい状況が続くコロナ禍にあって、豊橋煙火にとって明るいニュースとなった。

豊橋煙火 株式会社の詳しい情報は、右記の二次元コードからチェック!



年の歳月をかけ、ようやく安定した品質になりました。時代の流れによっても、この紙筒が手筒花火の主流になってもおかしくはありません。

未曾有の危機から脱し、新たな時代に向けて歩き出す

「花火業界が抱える現状の問題について教えてください。」
加藤▼新型コロナウイルス感染症の影響により、花火大会や祭りが中止となり、仕事がコロナ前の1割にも満たない状況に陥り、2020年5月から2022年10月まで従業員全員を完全に休業させなければなら

ませんでした。過去に経験したことがない状況であり、ここまで長引くとは想定していませんでした。3年間、雇用助成金を受けながら、わずかな仕事をこなしていましたが、多くの関係者様のご尽力により、昨年の夏過ぎから稼働し始め、徐々に仕事が増えて何とか工場を再稼働させることができるようになりました。

しかし、仕事は再開できましたが、原材料費や人件費の高騰はもちろん、取引先の廃業・事業撤退が深刻です。元々、花火の原料を生産する取引先の多くが事業承継の問題を抱えており、長引いたコロナ禍を契機に次々に廃業・撤退してしまつたとい

